

## クラウド・リーゼンフーバー

『中世における自由と超越——人間論と形而上学の接点を求めて』

上智大学中世思想研究所・中世研究叢書，創文社，昭和63年，xiii+612頁

稲垣良典

本書に収められた20篇の論文は、時間的な枠としてはアウグスティヌスからクザヌスにいたる約千年の期間をカバーし、考察・論述の方法としては思想史、概念史の方法から、或る重要な思想家における特定のテーマを分析、探求し、主要テキストを解明しようとするさいの解釈学的、反省・超越論的方法にいたるまで多彩な方法が駆使されており、一読して著者の広くかつ正確な哲学史的知識と思索力の強靱さに圧倒される思いがする。それと同時にこれら論文がすべて「同じ問題意識に基づき、一つの根本的なテーマを追求するものである」(序)ことにも強く印象づけられる。そのテーマとは本書の副題「人間論と形而上学の接点を求めて」によって言いあらわされているものであり、著者はこのテーマを巡ってトマス・アキナスが行った体系的な考察を中心に据えつつ、トマス以前と以後における中世の思想ないし精神的伝統をこのテーマに焦点を合せながら、時としては概観的に、時としてはテキストに密着しながら、解明しようと試みている。

人間論と形而上学とのかかわりは現代においてはハイデガーの哲学的企図を通じて哲学的関心の一つの中心にまでたかめられたテーマであるが、著者はトマスを中心とする中世の重要な思想家たちが、一方において人間の自由をめぐる様々の問題に関して、他方では存在および一、善、真などの超越論的概念に関して行った探求と思索は、深くこのテーマにかかわるものであったことをあきらかにする。したがって、著者の鋭い問題意識につき動かされた思想史的研究は、中世思想の研究者たちにとっての大きな刺激であるだけでなく、近代および現代哲学の研究者にとっても、無視したり、回避したりすることのできない挑戦であるに違いない。それというのも、著者の思想的探究は「現代の哲学的志向による解明を待ち望んでいるスコラ学の豊かな主題群」(364—365ページ)を鮮かに提示しているからである。

本書の全体を貫く根本テーマについてはここでその解説を企てるよりも、本書の随

所に見出される著者自身の明晰で生き生きとした表現について、読者が直接に確認されることを期待したい。一、二だけ例示すると、「序」において「存在への根本的な問いと、人間の自己自身への問いが、本質的に互いに条件づけ合い、支え合うとするならば、哲学的人間論は存在理解に導かれ、また存在論は人間の本性と課題を巡る問いをおして開かれていくことになる」とのべられており、またペルソナ概念に関する「(ペルソナの) 自己認識と自己所有における……自己還帰性を内容的に充たすのは、人間の理性的本性がそれへと認識的に関わる存在そのものである」(193ページ) という言明も本書の根本テーマの簡潔な表現である。さらに「自由の本質が、厳密かつ本来的な形態における働き、すなわち自己所有、自己獲得の働きとしての存在論的な根本概念に鑑みて解きあかされるとき、知性と意志からの人間論的構成を越え、あらゆる働きが存在、すなわち働きの担い手としての主体から発現するという基本的な洞察に基づいて自由の存在論的起源を解明する道が開ける」(352ページ) という言葉においても、基本的には「働き・行為は存在に従い・ともなう」(*agere sequitur esse*) というスコラ学の根源的洞察(トマス自身、かれの人間論においてこのいわば「公理」に訴えて考察を進めている)に導かれつつ、それを自らの反省・超越論的思索を通じてさらに展開し、そのことによって「人間論と形而上学の接点」に迫ろうとする著者の試みがあきらかに読みとられる。

ここで一つの批判的な問いを発しなければならない。人間論と形而上学のかかわりに光をあてようとする様々の試み——私自身が親しんでいるのはK・ラーナー、J・ロッツ、E・コーレット、B・ロナーガンなど、いわゆる「超越論的トミスト」たちによる試みだけであるが——の間において、著者の試みはいかなる独自性を有し、このテーマの展開と解明にたいしていかなる寄与をなしとげているか。私の見るところでは、右に挙げた「トミスト」たちの関心をもっぱら(すくなくとも哲学的探求の出発点において)認識理論の諸問題——抽象、判断、問い、方法など——に集中していたところから(ロッツにおいては自由やペルソナ概念への積極的な関心も見出されるが)、そこで語られる形而上学は主として認識、本質、真理との結びつきにおける存在の形而上学に限られる傾向があった。これにたいして、人間の自己理解の根底に自由を据え、人間の自己実現の営みを何よりも愛として捉える著者にとっては、形而上学はそれら「トミスト」たちにおけるような思弁的性格を克服するものとなっている。著者の表現に従うと「存在が行為的現実態(*actus*)であり、人格の自由が行為の

純粹かつ最高の形態であるなら、トマスの形而上学は行為の概念の類比をとおして根本的に人格的自由の形而上学である」(354ページ)。いいかえると、それは「存在を本質ないし本性として考察するのではなく、まず第一に人格の自由な自己決定の中で実現される行為的現実態として捉える人格的な意志の形而上学」(380ページ)である。トマスの人間論が予想し、またそれへと行きつく形而上学の根本的性格をこのようなものとして捉え、その基本構造をあきらかにしたところに著者による独自の寄与を認めることができるであろう。

なお本書の根本テーマについての論評を終わる前に、当のテーマと本書の構成について一言しておくべきであろう。本書は三部に分たれているが、第一部「自由とその世界」が自由をその様々の側面や実現の段階に即して考察する人間論を取り上げているのにたいして、第三部「精神と超越」にふくまれる諸論文の主題は優れて形而上学的である。そして第二部「意志と善」はまさしく第一部と第三部とを媒介し、第一部から第三部への展開を可能とする役割をふりあてられている。このような三部構成はたんなる偶然に由来するものでも、形式的整合性の追求でもなく、まさしく著者による根本テーマの探求と内的な連関をもつものといえるであろう。

各々の論文の内容を紹介することはこの書評の範囲を超えるので、次に私自身が興味を覚えた(それは私自身の研究関心と重なることに由来し、したがって「主観的な」選択ということになるが)いくつかのテーマあるいは論点についてのべることにしたい。

第一に、著者は「中世と近世との関係は、精神史のなかで最も不可解でありながら最も興味深い問題の一つである。……この二つの時代の関連については、今日なお明確な答えが与えられていない。中世と近世は、互いに無関係に続いているだけなのか、それとも弁証法的に対立しているのか、あるいは近世は中世思想の唯一可能な結実ではないにしても、その正当な嫡子なのか。」(79ページ)という問題提起を行い、とくに自由概念に関して(それと共に善と意志との関わり、自然と精神との関係などをめぐって)中世思想から近世思想への移行を「連続性と対立において示」(79ページ)す試みを提示している。著者の説明が説得的であるのはスコラ学前期、盛期、後期の特徴および、どのように先行する時期が続く時期を準備し、逆に後の時期はどのような仕方での時代の課題を受けとめ、それに応答しているかを詳細かつ明快に考察して

いることに由来する。ここからして読者は中世から近世への移行が、いわば中世思想自体にふくまれていたダイナミズムにうながされたものであることを理解し、近世思想の特徴と見なされるものの多くが中世に（様々の異った仕方）で遡るものであることに気付く。この問題は、14、15世紀の思想史的、精神的の研究の進展にともなって欧米でも、わが国でも関心を呼びおこしつつあり、自由の問題に関しては金子晴勇教授の『近代自由思想の源流』（創文社、昭・62）という貴重な業績があり、私自身もとくに認識理論に関して中世から近世への移行に光をあてる試みを行っている。この問題に関する著者の先駆的研究に刺激されて近世思想の中世的源流に関する研究が進み、そのことによって近世思想についてのより適正な評価や解釈が可能となることを期待したい。

第二に、著者は後期スコラ学に始まり、スアレスを経て近世思想へと続く「存在（および善、一もふくまれる）概念の貧困化」（96ページ）を鋭く指摘し、強調する。この「貧困化」は存在概念の一義性として論じられる問題と重なるものであるが、それを著者は13世紀末以来、「存在（と善）はますます事象的な対象性と考えられるようになっていった」（99ページ）、あるいは「自らの形而上学的基盤をもはや創造的に主題化する力を失った批判と分析の思考……分析的で精密な思考」の前に「存在概念の縮小」（136、137、138ページ）が起ったと言わなければならない。あるいは「存在は、しだいにたんなる本質の対極である実在の働きとして理解されるようになり、それによって存在そのものの善性はただの抽象物に色あせた」（216ページ）とも言われる。つまり「完全性の充実」（491ページ）としての存在が忘却され——トマス自身はその思想の成熟につれて、ますます存在概念を完全性として把握するようになった、と著者は指摘する（491ページ）——存在は「たんなる事実」（247ページ）と見なされるようになった、というのである。

ハイデガーのいう「存在の忘却」にたいしてはハイデガーのもとで学んだトミストたち（とりわけJ・ロッツ）が異議を申し立てているが、ここで著者が主張している、トマスにおいて「完全性の充実」および「行為的現実態」として捉えられた存在の豊かさが後期スコラ学以来、概念的分析の精密さ、厳密な思考の進展にもかかわらず、次第に見失われてしまったという意味での「存在の忘却」というテーゼは、近世、現代哲学の研究者にとっては重大な挑戦であり、また中世哲学の専攻者にとっては新鮮な刺激となりうるのではないか。

第三に、トマスのうちに強い「否定神学」的思想が見出されることは多くのトマス研究者の指摘するところであるが、著者はこのような解釈の意図を十分にくみとりつつ、トマスにおける「存在への精神の自己超越」には普通に語られる意味での否定神学を超える肯定的・積極的な側面がふくまれていることを指摘する。すなわち、「精神にはすべての肯定と否定の超越論的源泉として精神そのものを構成する神の奥儀への超越的連関が具わっている」(403ページ)と言われる。著者のこのような立場ないし基本的洞察は、アンセルムスの『プロスロギオン』第2章における神の存在証明についての解釈の試みの根底に見出されるもので、またこの洞察はここでの解釈の試みの全体(411—439ページ)を通じてこの上なく明澄かつ力強く展開されている。ついでながら、このように徹底した解釈をもってしても、アンセルムスの神の存在証明をめぐる論議を終結させることは不可能であろうが、著者の解釈の試みがこの論議のレベルを大きく高めたことは確かである。

著者は「否定神学」を超えるトマスの存在(および善)理解を、分有と類比をめぐるトマスの探求と思索の考察を通じてあきらかにするが(第15, 16, 17章)、さらにエックハルトの神秘主義の基盤をなす存在理解に関しても、そのようなトマスの流れをくむ側面があることを示す。エックハルトの卓越した、独創的で影響力の大きい霊的教説を支え、可能にしているのは、否定神学を超える、肯定的な存在・神理解である、とされる(549ページ)。このような著者の解釈は、とりわけわが国におけるエックハルト研究にとって重要な意義をもつものであり、今後の建設的な討論を期待したい。また著者はクザーヌスが「トマス・アクィナスの存在論と神学の体系的な洞察に負うところも多く、そのため彼もまた中世盛期のスコラ学の伝統の中に立っている」(560ページ)ことを指摘し、『隠れたる神についての対話』の詳細な解釈を通じて、徹底した無知の自覚によってはじめてたどりつかれうるような、すべての知を超えた、まさしくすべての知を可能ならしめる光としての神との出会いをクザーヌスが肯定していることを示す(481ページ)。この指摘もまた、最近わが国で活発に進められているクザーヌス研究にとって貴重な指針になるものと思う。

最後に著者のトマス理解について二、三の感想をのべて書評者としての責任を果たすことにしたい。著者のトマス理解および解釈がきわめて網羅的なテキストの参照と、主要テキストについての精密な解読に裏づけられていることはいうまでもないが、著者が「精神の開きの根拠を見届けようとする超越論的・存在論的な問題提起に、トマ

ス・アクィナスは充分に通じていた」(448ページ)とのべて、その観点からトマス解釈を一貫的・体系的に徹底させるとき、そこにはトマス自身の思想の理解・解釈を超えて、一定の方向へのトマス思想の発展が見出され、したがって、たとえばより経験論的な観点からの批判を呼びおこすことになると思われる。私が頭に置いているのは、たとえば「根源的概念と原理はまず第一にいつでも(すでに)精神の本性に従って、またそれゆえにいかなる感覚的認識にも先立って、直接に受容される。……明確な認識は……精神が無反省的な始源の中ですでに知っていることを精神自身に《開示する》のである」(266ページ)のような言明である。この言明が能動知性の光や第一原理の「自然本性的」把握などに関するトマス自身のテキストによって裏づけられることはいうまでもないが、この言明によってトマスの認識理論における「ア・プリオリ」が指示されていると解するかぎり、トマス認識理論の徹底的な経験論的性格を示唆する多くのテキストの抵抗に直面せざるをえない。ただし、この問題に関する私自身の考えは動揺しており、著者からの教示をまってさらによく考えたい。

つぎにトマスの愛に関する著者の透徹した、示唆に富む考察——「善の本質を最も深い意味で現し展開するのは愛」(271ページ)「愛とは……その根本形態においては、意義の実質を純粹にかつ人格的に実現すること」(311ページ)「愛は、その精神形而上学的な成立過程において、自らの内容および形相として無限定の善を、つまり形相的対象をとおして自らに与えられる無限の善さを、まず肯定する」(321ページ)「愛の本質構造は存在者の目的論的連関および世界の本質的秩序を開示することになる」(325ページ)「愛だけが善そのものにふさわしい応答」(359ページ)「愛とは、精神を自己自身へと最も深く到達させる、他者との一致であり、自己実現を目ざす自覚から発しつつその原動力を他者自身の充実のうちに汲むものだからである」(447ページ)——に接して、そこではトマスが *amor*, *dilectio*, *caritas* などの言葉で語ることががら *Liebe* という一つの言葉によって統一され、そのことによって人格的愛の形而上学とも呼ぶべきものを構築することが可能になっている、との印象を受けた。これもまた徹底したトマス解釈がトマス思想の発展へと導いた例である、といえるのではないか。

さらに著者がその探求と考察の重要な節目で「構成」「構成する」という言葉をしばしば有効な仕方を用いていることに強く印象づけられた。その用例を一、一、挙げてコメントするいとまはないが、その必要もないであろう。これは現象学に深く親しんでいる著者がその基本概念をトマス解釈にあたって活用している一例であり、その

ことが著者のトマス解釈の特徴となっていることを指摘することで充分であろう。そして、ここでも著者による徹底したトマス解釈がトマス思想を一定の方向へと発展させる結果を生じていることを繰返し指摘しておきたい。

最初にのべたように、本書はアウグスティヌスからクザーヌスにいたる中世思想の流れについて信頼度の高い概観を提供すると同時に、個々の重要な思想家が特定の問題に関して行った探求と思索についてきわめて精密な理解と解釈を提示しており、研究者にとっても知的な刺激に満ちている。これらのことから、本書が今後長い期間、わが国における中世思想研究の基本文献としての位置を占めることは確実であると思われる。

最後に、著者が完璧な日本語で講義し、学会活動に参加する姿を見慣れている同僚として、本書が「翻訳書」として出版されていることはむしろ奇異に感じられる。本書の諸論文が当初ドイツ語およびその他の現代ヨーロッパ語で書かれたものであることは事実であり、翻訳者たちの労苦にたいしても大いに感謝するが、著者が日本語で自らの哲学的探求と思索とを表現しようと試みていることは、そう言ってよければそれ自体きわめて興味深い、一つの哲学的実験であると思う。われわれ日本人が西洋の古典語や現代語のテキストと取り組みながら進めている仕事が欧米の哲学研究にたいしてどのような寄与となりうるのかも問題であるが、著者の論文を翻訳としてではなく、日本語で書かれた論文として読むとき、多くの思いがけない重要な発見が可能であるように思う。しかし、そのことに立入るのはこの書評にとっての課題から逸脱することであろう。

---

### 真方敬道著『中世個体論研究』

キリスト教歴史双書3, 南窓社, 1988年, 276頁

渡 部 菊 郎

「個」の問題は思想史の十字架である。